

第4章 単元「稲作の開始が契機とは限らない弥生時代への変化」 資料

第1時

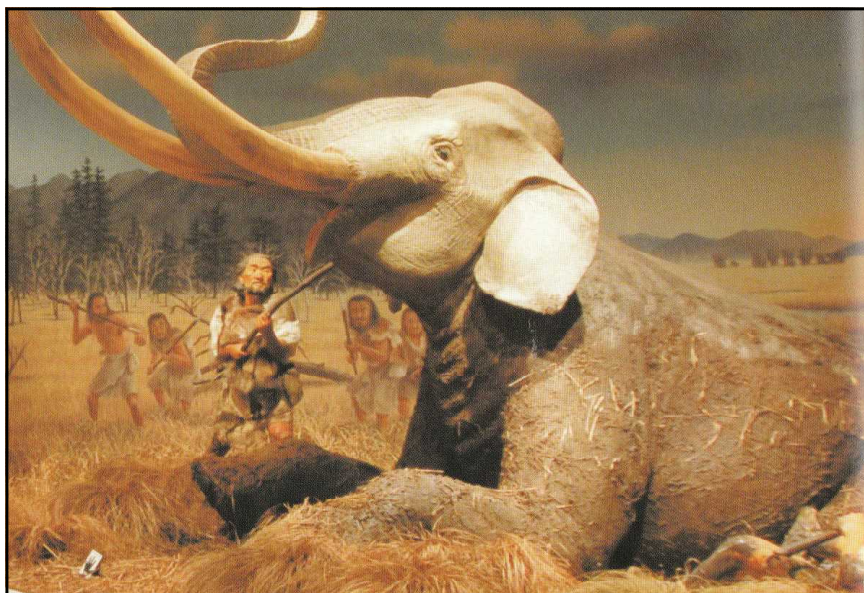
【資料1】旧石器時代の「尖頭器」(複製品)



【資料2】縄文時代の「石鏃」(複製品)

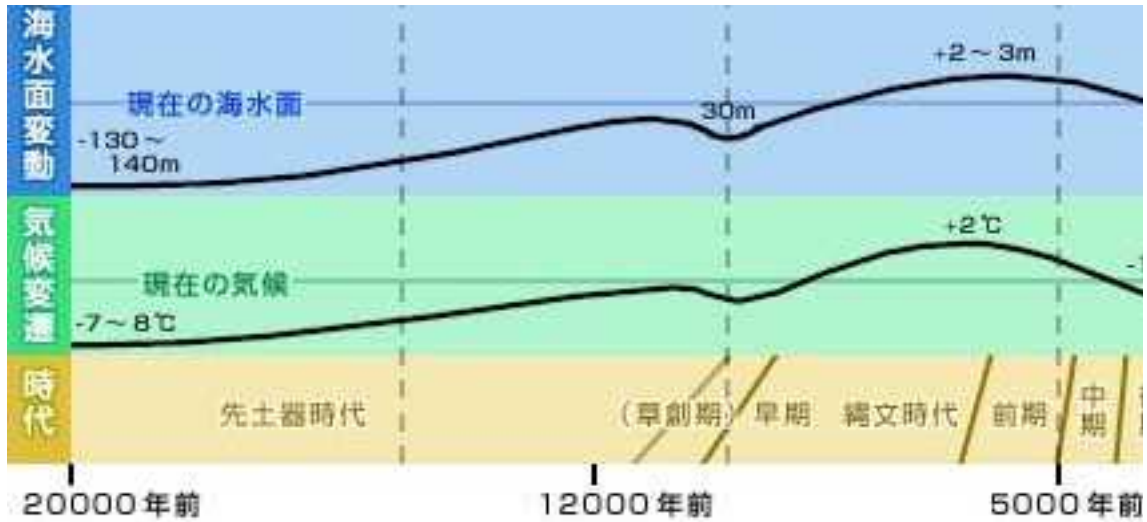


【資料3】ナウマンゾウ狩りの様子



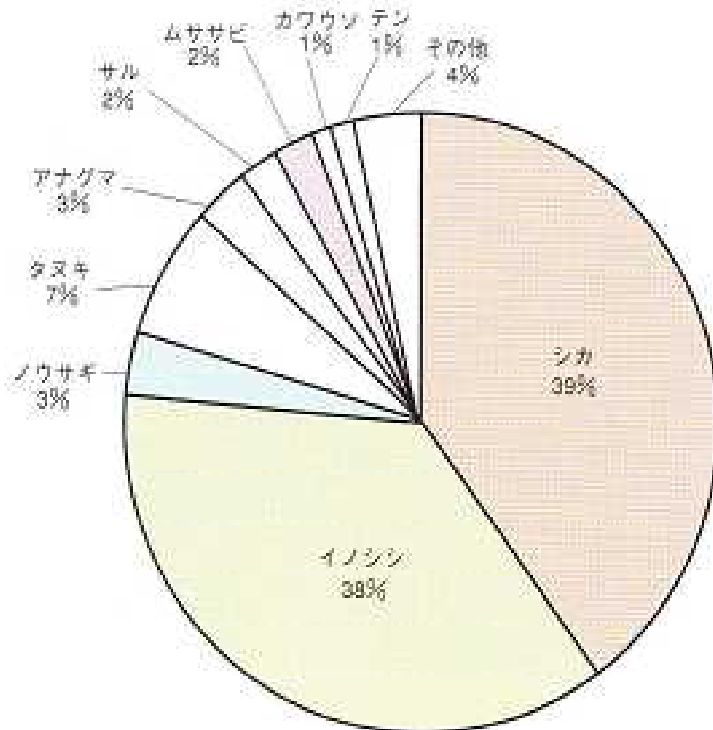
(兵庫県立考古博物館展示より, 筆者撮影)

【資料4】 海水面と気温の変化グラフ



(独立行政法人海洋研究開発機構監修「海のほしとわたしたち」http://www.jamstec.go.jp/jamstec-j/enlight/umihoshi/learning/link_win/2_0802.htmlより筆者作成, 最終閲覧日, 2015年1月3日)

【資料5】 縄文時代の陸獣狩猟の割合

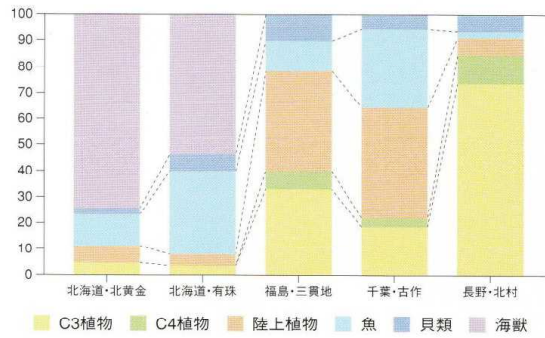


(国立歴史民俗博物館編『縄文文化の扉を開く 三内丸山遺跡から縄文列島へ』2001年, p. 36より筆者作成)

第2時

【資料1】縄文集団のタンパク質供給源

縄文集団のタンパク質供給源 縄文人の内でも、生態系により、食料利用はさまざまであり、北海道内浦湾岸の貝塚人のように海獣に依存する比率の大きいものから、関東地方の貝塚人のように、多くの供給源を確保しているもの、中部山地中の北村遺跡のようにC3植物に大きく依存するものなど、各々適応戦略を示していて、決して一様ではないことがよみとれるでしょう。



(国立歴史民俗博物館編『縄文文化の扉を開く 三内丸山遺跡から縄文列島へ』2001年, p. 64より筆者作成)

【資料2】三内丸山遺跡食の復元

3・6

食の復元

土器の観察から、基本的な調理の仕方は「煮る」であったことが確認されました。現在のシチュウや寄せ鍋といったところですが。魚や動物の骨を調べても「焼いた」跡はほとんどありません。また、木の实を利用したクッキーやハンバーグのようなものも作られていました。一度にたくさん捕れるサバやブリ、サケ、そしてクリは保存食として加工された可能性があります。

縄文時代のイモ類の利用 京都府舞鶴市松ヶ崎遺跡から、前期のヤマイモ属のムカゴ（葉の付け根に生じる珠芽で、繁殖もし食用にもなり、保存もできます）が炭化して出土したことから、列島でのイモの利用が確実となりました。現在でも自生し、地中のイモもムカゴも食用になっています。



京都府舞鶴市松ヶ崎遺跡で出土した前期のヤマイモ属のムカゴ 径1.8cm

三内丸山遺跡から出土したクリの実

食材 獣の肉や魚などの動物質や植物質の食材が豊富にあったことが認められます。ゴミ捨て場を調べると、縄文人の食生活の様子が見えてきますが、最も多いのがクリとクルミで、これが食料の大半を占めていたと考えられています。海が近いので魚が豊富だった反面、動物は意外に少ないようです。他にマメ、ゴボウ、エゴマ、ヒョウタンなどが栽培され、利用されたものと考えられます。集落の後半には栽培ヒエも出現しましたが、クリやクルミほど依存していなかったようです。



縄文の携帯食の復元



縄文風寄せ鍋料理の復元

食事の道具 「煮て」調理された食事は、土器からオタマや柄杓のようなもの（縄文遺跡でみつかっています）で小型の土器や木器に盛りつけられました。それをスプーンで口に運んでいたようです。



秋のサケ料理の復元



縄文風デザート

片口付の木製容器



縄文まほろば博実行委員会「縄文の扉」NHK出版 1996より

掘り棒の出土 先端を尖らした掘り棒で、もう一方の端は握りやすくしてあります。イモやクリなどの収穫に広く使われたものでしょう。



（国立歴史民俗博物館編『縄文文化の扉を開く 三内丸山遺跡から縄文列島へ』2001年，p. 30より筆者作成）

【資料3】縄文中期人口密度分布，地域別推計人口

	東北地方	関東地方	近畿地方	九州地方
縄文早期の人口(約8100年前)	2,000人	9,700人	300人	1,900人
縄文中期の人口(約4300年前)	46,700人	95,400人	2,700人	5,300人

(鬼頭宏『人口で見る日本史』PHP研究所, 2007年の推計による。)

【資料4】縄文時代の遺跡分布

縄文中期遺跡分布

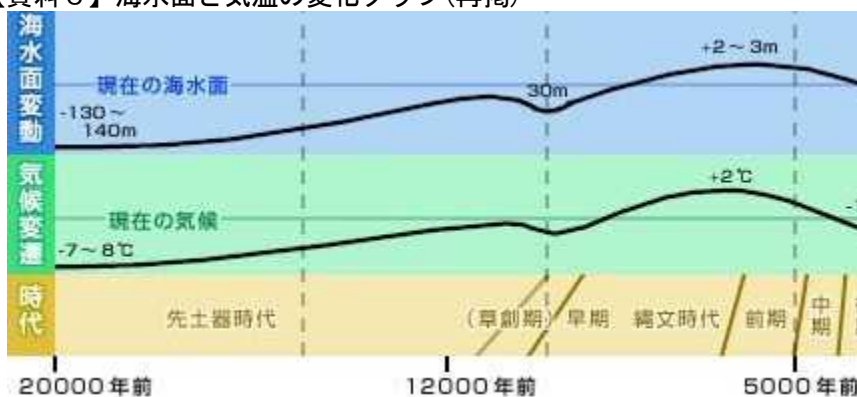


【資料5】

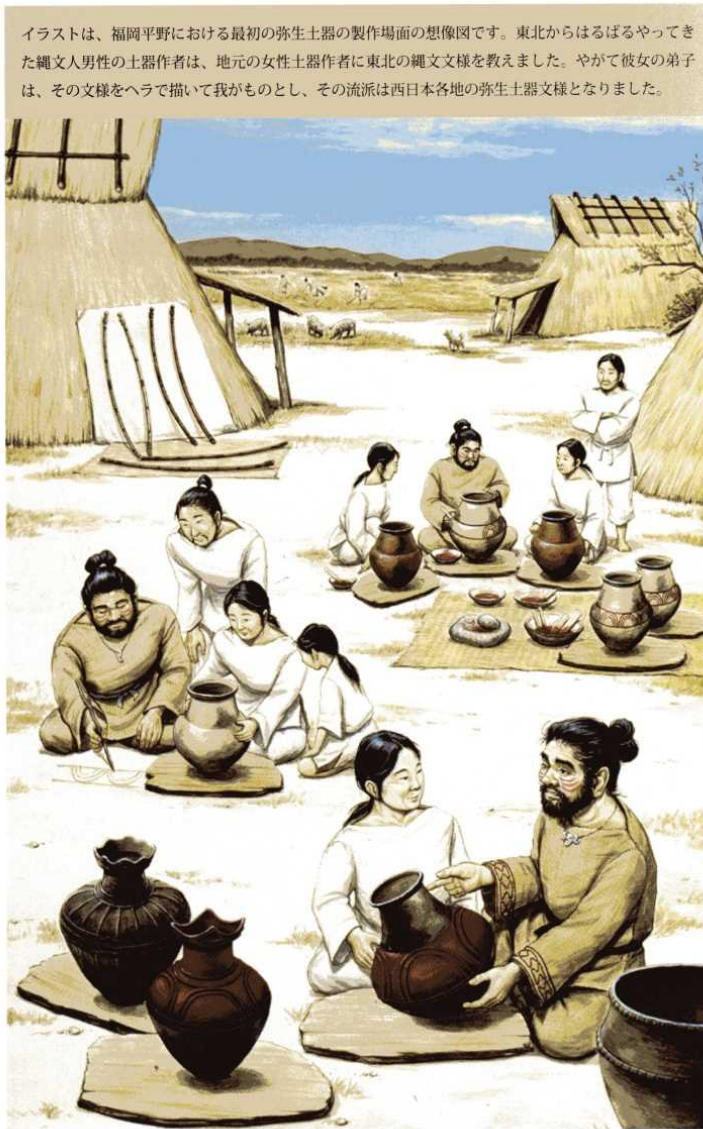
縄文後期遺跡分布



【資料6】海水面と気温の変化グラフ(再掲)



【資料7】福岡平野における土器製造の想像図



西に行った亀ヶ岡 イラスト 石井礼子

(国立歴史民俗博物館編『弥生はいつから 年代研究の最前線』2007年, p. 70より筆者作成)

第3・4時

【資料1】縄文晩期の各地方の・人口表

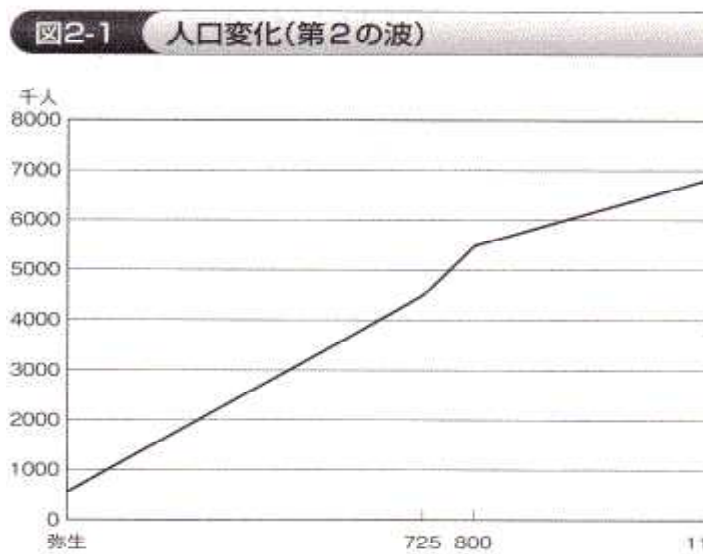
【資料16】人口の変化「縄文晩期の各地方の人口表」(縄文時代編2)					
	東北地方	関東地方	近畿地方	九州地方	全 国
縄文早期の人口(約8,100年前)	2,000人	9,700人	300人	1,900人	21,000人
縄文中期の人口(約4,300年前)	46,700人	95,400人	2,700人	5,300人	261,300人
縄文晩期の人口(約2,900年前)	39,500人	7,700人	2,000人	6,300人	75,800人

※人口はいずれも推定

(鬼頭宏『人口で見る日本史』PHP研究所, 2007年の推計による。)

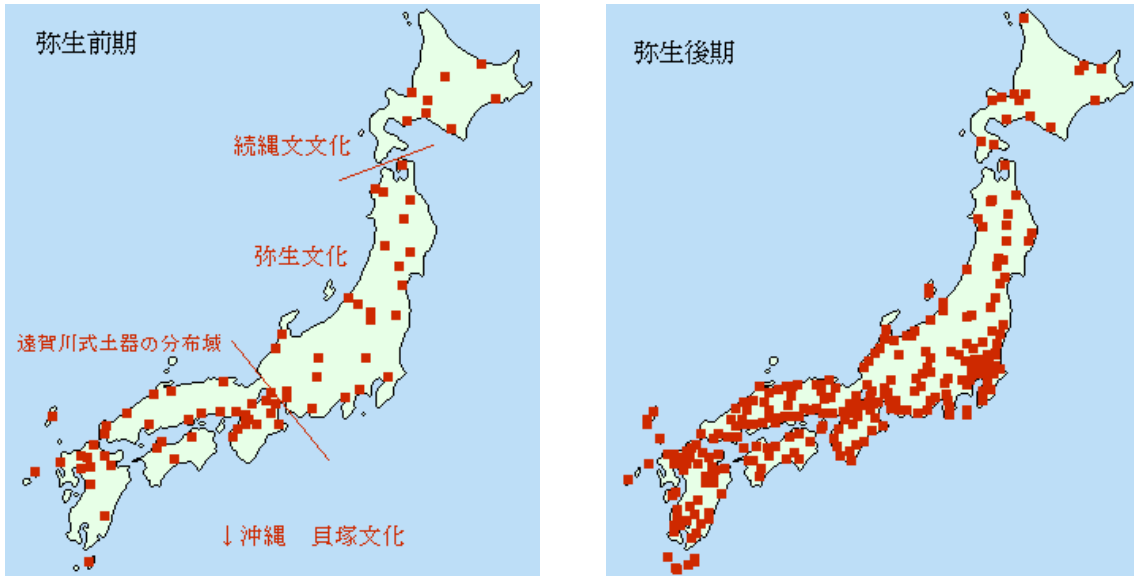
【資料2】弥生時代からの人口変化のグラフ

【資料17】弥生時代からの人口変化のグラフ

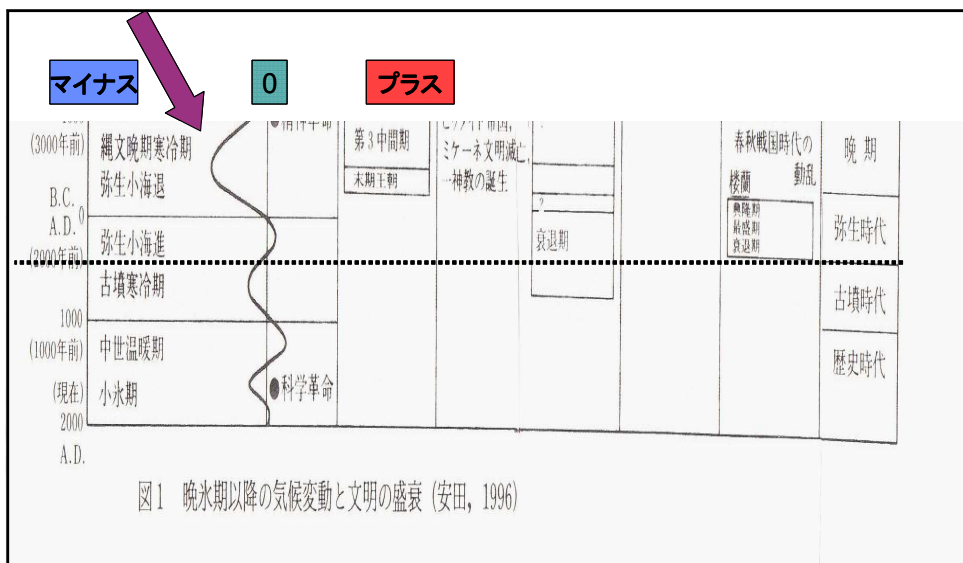


(鬼頭宏『人口で見る日本史』PHP研究所, 2007年, p. 40より筆者作成)

【資料3】 時期ごとの遺跡分布図



【資料4】 縄文晩期からの気温変動のグラフ



(安田喜憲『縄文文明の環境』吉川弘文館, 1997, pp. 18-19より筆者作成)

【資料5】水田稲作の広がり



(国立歴史民俗博物館編『弥生はいつから 年代研究の最前線』2007年, p. 32より筆者作成)

【資料6】弥生時代の稲作風景

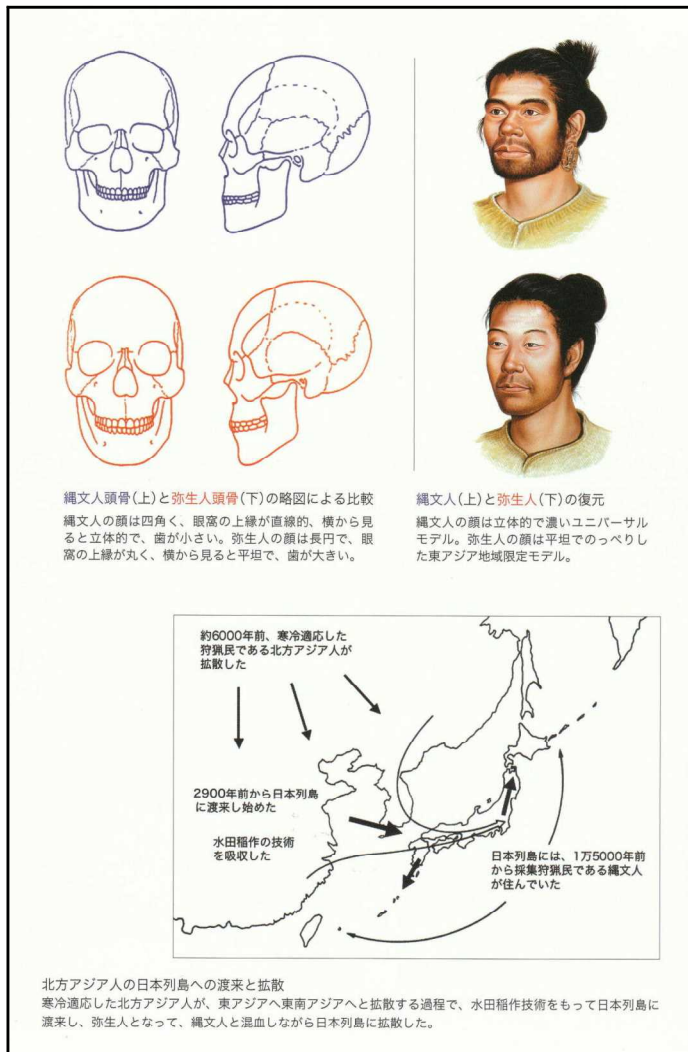


(大阪府立弥生文化博物館「展示資料」より筆者作成)



(大阪府立弥生文化博物館「展示資料」より筆者作成)

【資料7】 渡来人の来訪の地図，縄文人と弥生人の骨格の違い



(国立歴史民俗博物館編『弥生はいつから 年代研究の最前線』2007年, p. 70より筆者作成)

【資料8】 弥生時代のブタの復元図



(国立歴史民俗博物館編『弥生はいつから 年代研究の最前線』2007年, p. 81より筆者作成)

【資料9】 鉄器の普及の説明文

鉄の威力

鉄の道具や武器は、破壊力・強度・耐久性などの点で、木や石のものより一段と優れていました。例えば鉄の斧は石斧より1/3ないし1/4の時間で、木を切り倒すことができます。また、鉄の道具を使って、今まで以上に細かいところまで加工ができるようになりました。しかし、一度に鉄器が普及したわけではありません。6～700年におよぶ弥生時代から古墳時代にかけて、工具や農具が少しずつ、石や木から鉄に変わっていきました。

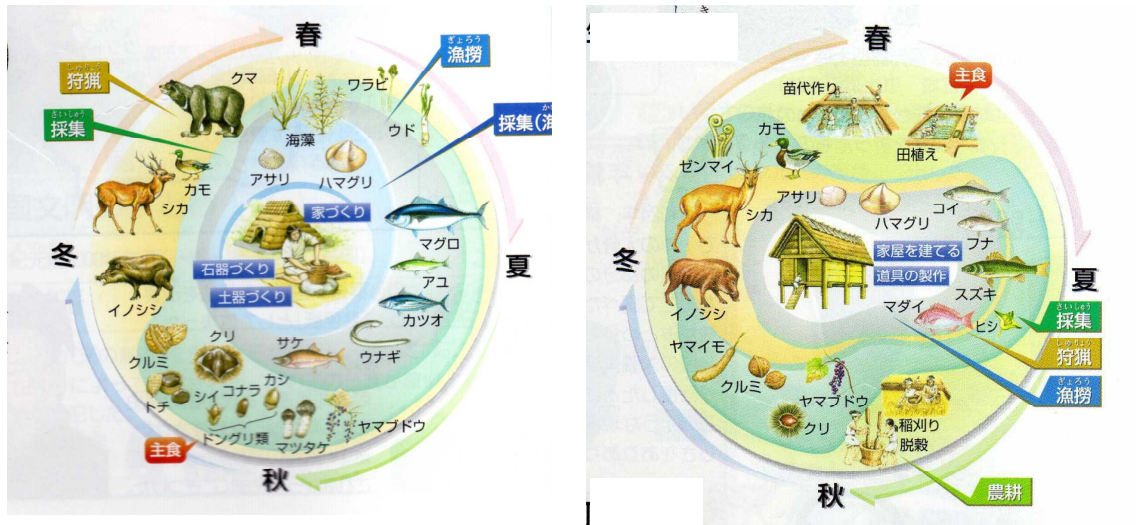
(大阪府立弥生文化博物館「展示資料」より筆者作成)

【資料10】 木製農具の復元 (写真)



(大阪府立弥生文化博物館「展示資料」より筆者作成)

【資料11】縄文カレンダー（左）と弥生カレンダー（右）



(東京法令出版『グラフィックワイド歴史』2010年p. 36, p. 38より筆者作成)

第5章 単元「分立する権力と武士の登場」 資料

第1時

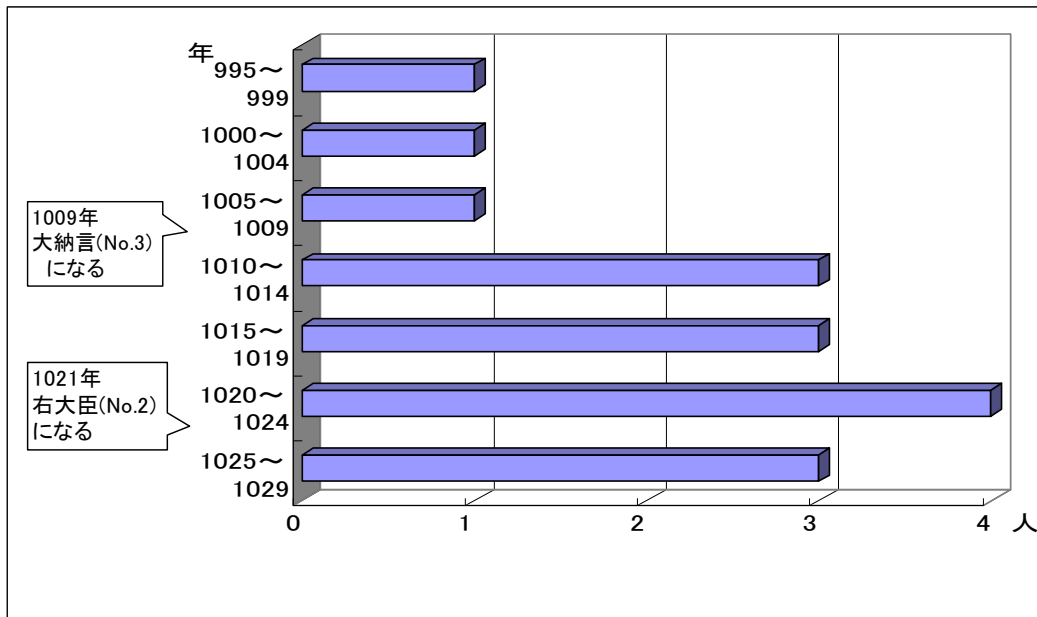
【資料1】道長に関する年表

年次	年齢	出来事
966	1	藤原兼家の五男として生まれる。
982	17	昇殿を許される。(貴族の仲間入り)
987	22	従三位に昇叙する。(公卿：上級貴族の仲間入り) 左大臣源雅信の娘、倫子と結婚する。
990	25	兄道隆が摂政となる。
991	26	権大納言(大臣に次ぐ高官)となる。
992	27	長男頼通が生まれる。
995	30	3月、道隆の子伊周、内覧となる 4月、道隆死去。伊周の内覧停止。 5月、内覧となる。 6月、右大臣となる。藤原氏の氏長者になる。
996	31	1月、伊周、弟の隆家とともに、花山天皇を弓で射る。 4月、伊周流罪。 7月、左大臣となる。一上となる。
999	34	娘の彰子、一条天皇の妃(女御)となる。
1008	43	彰子が皇子を産む。後の後一条天皇。
1009	44	彰子が皇子を産む。後の後朱雀天皇。
1010	45	娘の妍子、のちの三条天皇の妃となる。
1015	50	准摂政、左大臣となる。
1016	51	1月、摂政となる。 孫が後一条天皇となる。
1017	52	3月、摂政を辞任する。長男頼通があとを継ぐ。 12月、太政大臣となる。
1018	53	太政大臣を辞任する。 娘の威子、後一条天皇の妃となる。
1019	54	出家する。
1021	56	娘の嬉子、のちの後朱雀天皇の妃となる。
1025	60	嬉子、のちの後冷泉天皇を産み、死去。
1027	62	死去。

※ 内覧：天皇が裁可する文書など一切を先に見る役職。政治の主導権を握ることができる立場。
氏長者：その氏の代表者。特に藤原氏の長者、源氏の長者などは、大きな権威と力をもっていた。
一上：筆頭、最高位の公卿(一ノ上卿)という意味で、通常は左大臣のことを指す。
摂政：天皇が幼い時に設置される役職。天皇の補佐、代理者として位置づけられる。
関白：天皇が成人(元服)してから、設置される役職。
→道長の時代、摂政や関白になると、役人などの人事を決める会議(陣^{じんのさだめ}定)に参加しなかった。

(山中裕『藤原道長』吉川弘文館, 2008年, pp. 239-244より筆者作成)

【資料2】藤原実資の家司家人の受領在任期間



(佐々木恵介『受領と地方社会』(日本史リブレット山川出版社, 2004年, p. 56より筆者作成)

【資料3】『小右記』寛仁2. 6. 20条「道長の御殿新築の際、伊予守 源頼光によって寄付された家具、調度品」

「道長の御殿新築の際、伊予守 源頼光によって寄付された家具、調度品」

6月20日 伊予守 頼光は、家中の家具や調度品をことごとく寄付した。

鏡

劍

銀の器

琴

桶

ほうき

屏風 20帖

几帳(絹の布を下げた
間仕切り) 20基

唐びつ(服をしまっ
ておく大きい物入れ)

頼光は夏・冬それぞ
れの衣装を詰めて贈っている)

管弦の楽器

枕箱(手回り品や金品を入れる箱)

唐櫛笥(化粧品を入れる箱。化粧道具を2セット入れて贈っている)

厨子(現在の仏壇にあたるもの)

など。



(『小右記』寛仁2年(1018)6月20日条, 東京大学史料編纂所編『大日本古記録 小右記』5, 岩波書店, 1969年, pp. 42-43より筆者作成)

第2時

【資料1】「国司の館」『松崎天神縁起絵巻』



(小松茂美編『松崎天神縁起 続日本絵巻大成16』中央公論社, 1983年, p. 53より筆者作成)

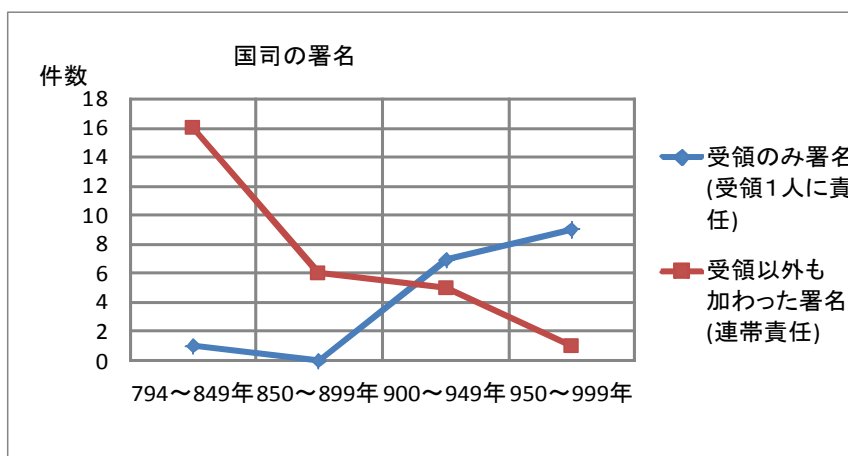
【資料2】「仁寿二年の法令」

「仁寿2年の法令」(852年)

庸や調などの税が納まっていなければ、(これまでは、国府の役人の連帯責任であったのを) 責任のおおもとが官長(受領)にあるとし、官長と報告者の給与を没収する。

(佐藤泰弘「受領の成立」吉川真司編『日本の時代史5 平安京』吉川弘文館, 2002年, p. 107より筆者作成)

【資料3】「国司の署判」



(佐藤泰弘「受領の成立」吉川真司編『日本の時代史5 平安京』吉川弘文館, 2002年, pp. 108-111より筆者作成)

【資料4】「尾張国郡司百姓等解文」

「尾張国郡司百姓等解文」(永延2年(988)抜粹)
第27条 元命の子弟や家来が、百姓から財物(財産)を無理やり奪い取っている。
第29条 元命の子弟や家来は、国内に佃(直接経営ができる土地)を(勝手に)割り当てて、収穫した稲を持って行ってしまった。その上、他の税まで取られてしまった。

(歴史学研究会編『日本史史料[1] 古代』岩波書店, 2005年, pp. 309-313より筆者作成)

【資料5】「藤原菅根等上総国藻原荘施入帳」

「(藤原菅根等上総国藻原荘)施入帳」寛平2年(890)
藻原荘は私(菅根)の曾祖父(ひいおじいさん)が上総介・守であったときに手に入れた牧場を開発したところであり、曾祖父と祖父で土地を購入して田代荘も領地とした。祖父は藻原荘を「すみか」にしていたので、死後はそこに葬り、この地を興福寺に施入(寄付)してほしいと頼まれた。(以下略)

(「朝野群載」巻17, 黒板勝美編『新訂増補国史大系』吉川弘文館, 1938年, 第29上巻, p. 430より筆者作成)

【資料6】「類聚三代格」巻19寛平3.9.11

「太政官符 京都にいた子弟の地方への移住を禁止すべきのこと」
任期を終えた国司(受領)や貴族の子孫が地方に住み着くことは、(地方の)役人や百姓の迷惑になり、農業を妨げることになるので、厳しく検査し、生まれた土地に帰すようにしなさい。(以下略)

(寛平3年9月11日太政官符「類聚三代格」巻19, 黒板勝美編『新訂増補国史大系』吉川弘文館, 1980年, pp. 620-621より筆者作成)

【資料7】「延喜2年阿波国田上郷戸籍」

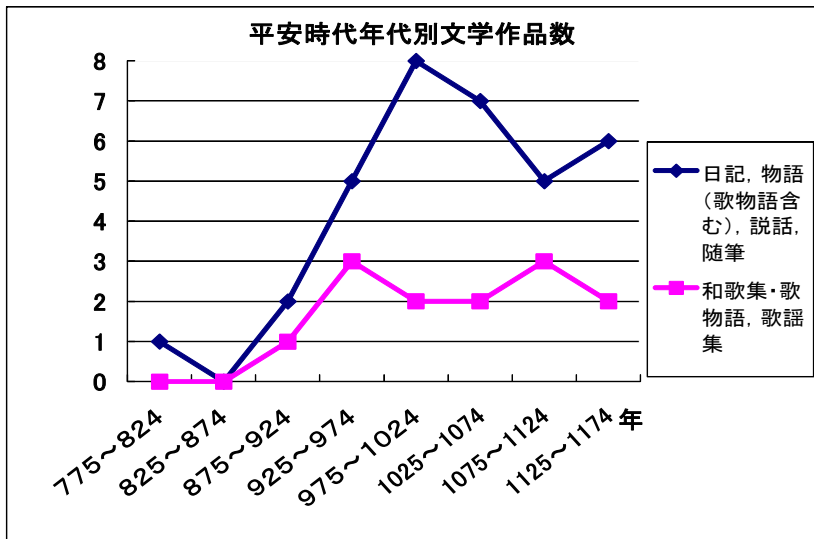
「延喜2年阿波国田上郷戸籍」(902年)

阿波国田上郷(田上村)	戸数	5戸	男	59人
	総人数	435人	女	376人
	課税する人	24人		
	課税されない人	411人		

(竹内理三編『平安遺文 第1巻』1974年, pp. 224-241より筆者作成)

第3時

【資料1】「平安時代年代別文学作品数」



(岡一男編『平安朝文学事典』東京堂出版, 1977年より筆者作成)

【資料2】「国風文化」

「国風文化」	
国風文化	
時期	9世紀末～11世紀半ば
文学	歌集 古今和歌集
	物語 源氏物語
	随筆 枕草子
美術	建築 宇治平等院鳳凰堂
	→やがて地方へ:(例) 陸奥国平泉(現在の岩手県平泉町)
	毛越寺浄土庭園, 中尊寺金色堂など
美術	絵画 源氏物語絵巻
	阿弥陀来迎図

(「国風文化」東京法令出版『グラフィックワイド歴史』2010年, p. 62より筆者作成)

【資料3】「仮名文字と文学」

3 かな文字と文学の発達

不奴川寸久宇為利 美比仁知之幾以无和良也末波奈太左加安
ふぬつすくうゐり みひにちしきいんわらやまはなたさかあ

遠呂与毛保乃止曾己於恵礼 女部祢天世計衣 留由武
とみよもほのとそおゑれ めへねてせけえ るゆむ
をろよもほのとそおゑれ めへねてせけえ るゆむ

解説 894年、菅原道真の意見により遣唐使が停止され、日本独自の文化が発達した。万葉がなをくずした字体で書いたものを「草がな」といい、平安初期から使われた。草がなをさらに書きくずしたものが「平がな」で、国語の表現を簡単にし、和歌や物語文学の発展をもたらした。



←5 源氏物語
絵巻 「源氏物語」は紫式部が11世紀はじめに書いた長編小説。
(財)五島美術館蔵

(東京法令出版『グラフィックワイド歴史』2010年p. 36, p. 62より筆者作成)

【資料4】「紫式部日記」51段

「紫式部の日記」(1009年)

主上(一条天皇)が、源氏物語を人に読ませては、お聞きになっていたときに、「この人はあの難しい(漢文で書いてある)日本書紀などの歴史書をお読みのようだね。本当に学識があるらしい。」とおおせられたのを(天皇にお仕える女官が)あて推量して、「すばらしく才能があるそうよ」と殿上人(上級の貴族)に言いふらして、「日本紀の御局」などとあだ名を付けたそうなんです、本当に苦笑してしまいましたね。

※ 紫式部は藤原道長の娘で、一条天皇の中宮(妃)である、彰子の教育係として仕えていた。

(「紫式部日記」51段, 歴史学研究会編『日本史史料』岩波書店, 2005年, pp. 412-413より筆者作成)

【資料5】『末法思想』の説明」

「末法思想」

釈迦の入滅後（死後）、正法（1000年）、像法（1000年）、末法（10000年）へと時代が下るにしたがい、仏法がおとろえ、乱世になるという考え方。日本では、1052年に末法の最初の年とされ、平安中期以降、極楽往生を願い、浄土教が流行した。

（東京法令出版『グラフィックワイド歴史』2010年, p. 63より筆者作成）

【資料6】「平等院鳳凰堂の復元図」



（平等院ミュージアム鳳翔館編『CG写真集平安色彩美への旅』P. 14より筆者作成）

【資料7】「院政期の陸奥国平泉毛越寺浄土庭園」



（毛越寺ホームページ http://www.motsuji.or.jp/yurai/images/yurai_p04.jpgより筆者作成）

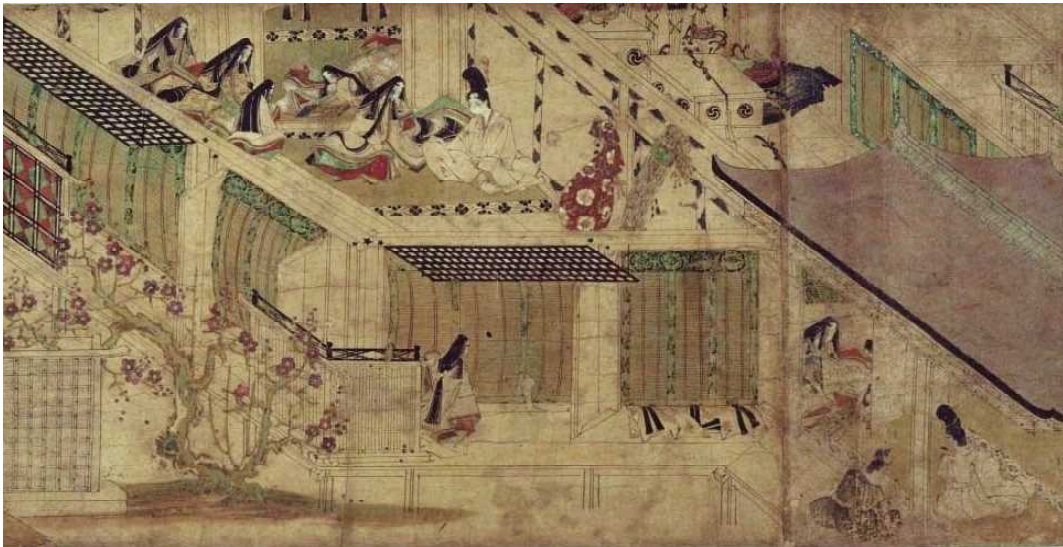
【資料8】「鳳凰堂南面来迎図」



（平等院ミュージアム鳳翔館編『CG写真集平安色彩美への旅』p. 35より筆者作成）

第4時

【資料1】(1) 貴族のような武士の屋敷



(小松茂美編『続日本の絵巻12 男衾三郎絵詞, 伊勢新名所絵歌合』中央公論社, 1992年, pp. 12-13より筆者作成)

(2) 武士の屋敷



(小松茂美編『続日本の絵巻12 男衾三郎絵詞, 伊勢新名所絵歌合』中央公論社, 1992年, pp. 20-21より筆者作成)

【資料2】 武士のように見える人々（僧兵）



（「天狗草子絵巻」『続日本の絵巻26土蜘蛛草紙・天狗草紙・大江山絵詞』，小松茂美，中央公論社，1993年より筆者作成）

【資料3】 「軍団の廃止とその影響」（地方政治，軍事にかかわるしくみの変化）

- 792年 東北と九州をのぞき，律令制の兵役による軍団が廃止される。
- 800年代（9世紀） 東国では朝廷の支配に属した蝦夷の反乱が相次いだ。相次ぐ反乱に対し朝廷は、「追捕官符」（反乱を鎮めることの命令書）を交付し，押領使（反乱などをしずめるために朝廷から派遣された使い）を派遣した。
- 896年（寛平8年） 庸調の徴収と中央への送付など，国ごとの行政の一切は受領国司1人の責任とされる。（それまでは，国ごとに置かれた国司[4階級に分かれた]4～10人の連帯責任で地方の政治が行われた）→受領国司の責任が重たくなると同時に，税の徴収などの権限も強化された。
- 974年（天延2年） 尾張国の百姓らが国守藤原連貞の非法（法にはずれること）を太政官へ訴えるなど，国司と地方豪族（元郡司や有力な百姓など）との対立が激しくなる。

（下向井龍彦『武士の成長と院政』日本の歴史7巻，講談社，2001年より筆者作成）

資料

【資料4】「平忠常の乱追討使派遣」（『応徳元年皇代記』，万寿五年条より筆者作成）

まんじゅ 万寿5(1028)年、あわ 安房(千葉県)の受領国司 たいらのこれただ しもふさ 平惟忠が下総(千葉県)の
たいらのただつね 平忠常に(戦いで)焼き殺されました。よって、京都の治安維持と民政を担当
する役人(けびいし 検非違使)のたいらのなおかた なかはらのなりみち 平直方と中原成道(共に下級貴族)を向かわせ
た。

※ このように、地方で反乱が起きると都から武力に優れた人が派遣されるか、
武力にすぐれた国司に平定が命じられるかして、反乱をおさえようとした。

(『応徳元年皇代記』，万寿五年条，歴史学研究会編『日本史史料1古代』岩波書店，2005年，p.370より筆者作成)

【資料5】「天慶3年正月11日官符」

もし首領(リーダー)の将門を殺せば、有力貴族になる資格(五位以上の官位)と領地(田畑の恩賞)を与える。この権利は末代の子孫まで続く。副将を斬った者は、それに見合った官位・爵位を与える。

(「天慶3年(940)1月11日太政官符(命令書)」東京大学史料編纂所編『大日本史料』第1編の7，東京大学出版会，1989年，pp.581-582より筆者作成)

【資料6】「平将門の乱前後における押領使の位の変化」

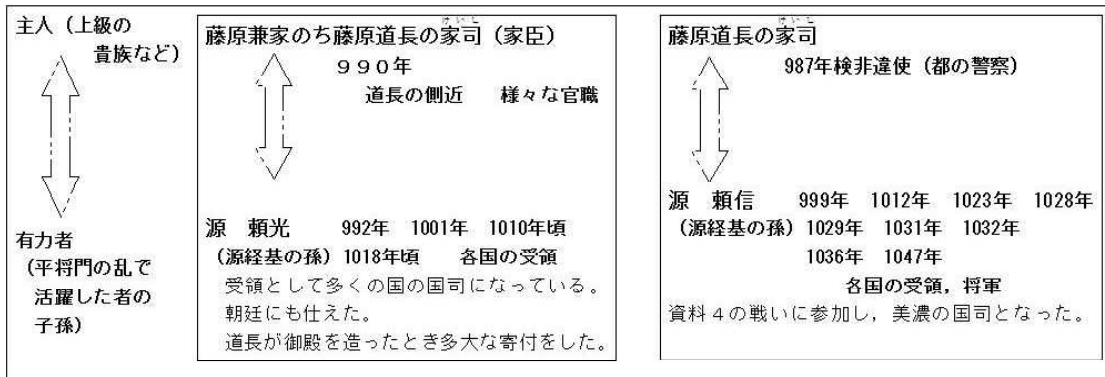
乱の前 → 乱の後

目安となる位	大国(武蔵・常陸・上野・陸奥など)	上国(下野・丹波・上総など)	中国(安房など)	太宰府	
正五位上				〔しょうに〕 少式	1名
正五位下					
従五位上	〔かみ〕 守 1名				
従五位下		〔かみ〕 守 1名			
正六位上					
正六位下	〔すけ〕 介 1名		〔かみ〕〔すけ〕 守 介 1名		
従六位上		〔すけ〕 介 1名			
従六位下					
正七位上					
正七位下	〔たししょう〕 平貞盛大掾 1名	源經名 1名			
従七位上		〔じょう/ぞう〕 掾 1名			
従七位下		藤原秀郷 1名			
正八位上			〔じょう/ぞう〕 掾 1名		
正八位下					
従八位上					
従八位下				〔じょう/ぞう〕 掾 1名	

(下向井龍彦『武士の成長と院政』日本の歴史7巻，講談社，2001年p. 99より筆者作成)

【資料7】「都では貴族の家来（家人）となっていた武士」

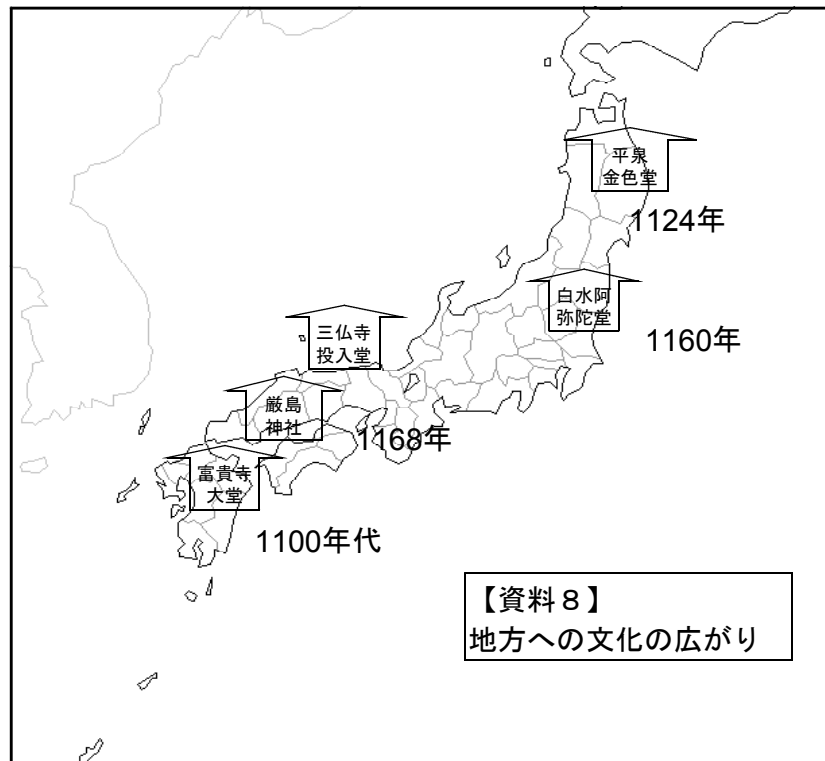
11世紀になると、地方で武力を頼られた軍事貴族が、藤原摂関家などの有力貴族に私的に仕えるようになった。



（下向井龍彦『武士の成長と院政』日本の歴史7巻，講談社，2001年より筆者作成）

【資料8】「地方への文化の広がり」（自作）

11世紀から13世紀（1000年～1200年）にかけて地方に寺院建築をはじめとする文化が地方の武士をはじめとす人々に広まった。



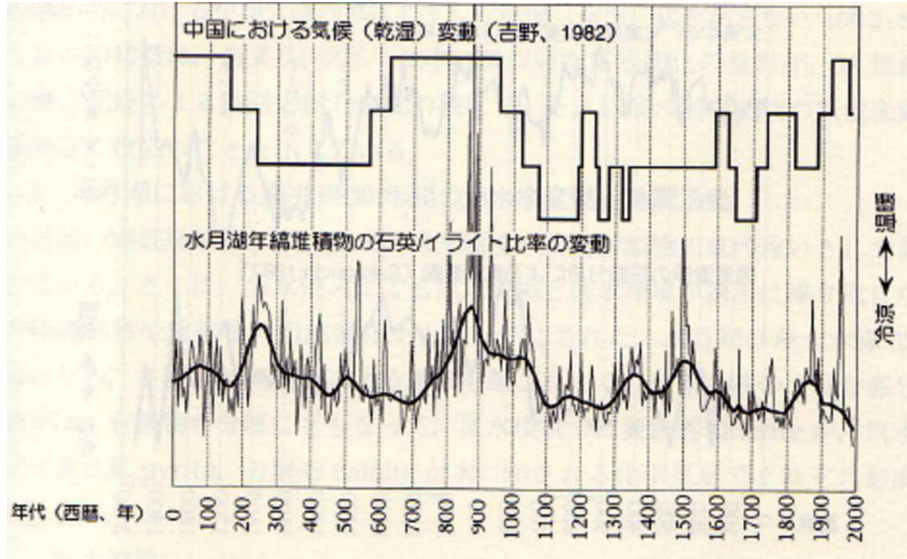
【資料9】「平安時代の気候変動」

800年から1100年にかけての気候はどのように変化しているのだろうか。

寒冷化：作物の不作

温暖化：水不足（洪水）

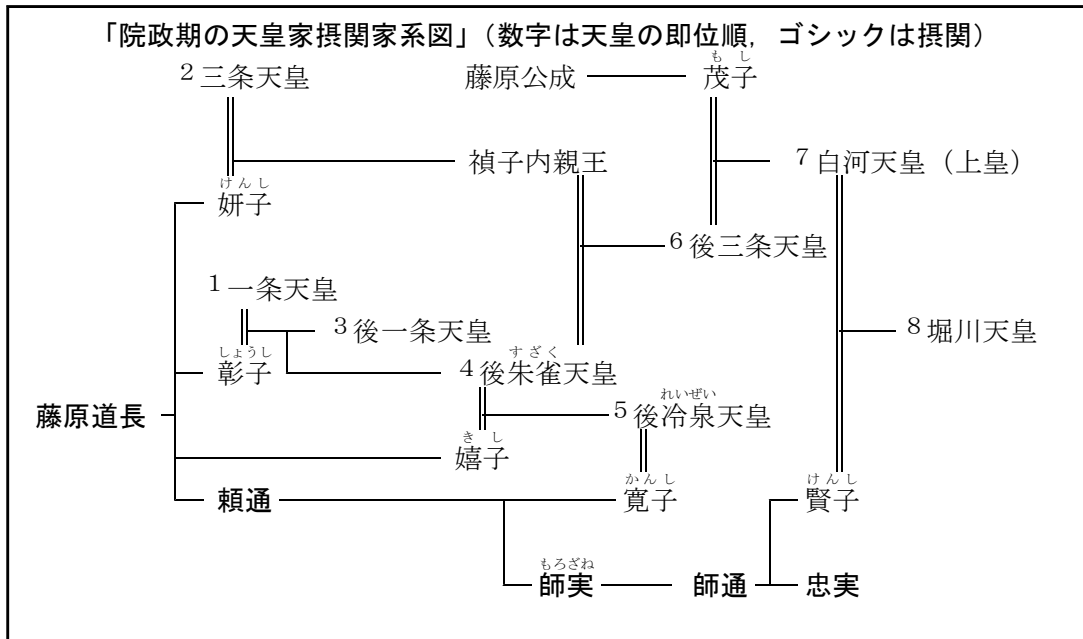
が多いとされる。



（福澤仁之「堆積作用と環境」『環境と人類』朝倉書店，2000年，p. 19より筆者作成）

第6時

【資料1】「院政期の天皇家系図」



(加藤友康「摂関政治と王朝文化」加藤友康編『日本の時代史6 摂関政治と王朝文化』
吉川弘文館, 2002年, p. 89より筆者作成)

【資料2】「白河上皇の政治1」

(白河上皇は) 後三条天皇がお亡くなりになってから、天下の政治をすること
57年、天皇の在位14年、位を(子どもに)譲って(上皇となって)43年、
思うにまかせ、これまでのきまりや前例にこだわらず、位を与えたり、役人を
任命したりなされた。その威厳は国中に広がり、天下の人々は付き従った。

(『中右記』1129(大治4)年7月7日条, 増補史料大成刊行会編『増補史料大成』14, 臨川書
店, 1965年, より筆者作成)

【資料3】「白河上皇の政治2」

今夜、役人を決める会議(除目)があった。(中略)白河院(上皇)のそばに
いて、かわいがられる人が(15人中7人も受領に)任命されている。(藤原)顕頼
などは父顕隆の褒美を譲られて14歳で出雲守となった。これは世にもまれな例で
ある。(中略)受領の任命の次第はとても乱れており、本来のきまりが懐かしい。
ただただ仰天した。

(『中右記』1108(嘉承3)年正月24日条, 増補史料大成刊行会編『増補史料大成』11, 臨川
書店, 1965年, より抜粋)

【資料4】「院政の経済的基盤」

受領	奉仕して建設した御所・寺院	当時の役職	奉仕の恩賞
藤原顕季	閑院御所	播磨守	重任
藤原家保	鳥羽証金剛院	越前守	位の上昇
藤原顕能	土御門内裏	讃岐守	重任
藤原基隆	尊勝寺東西塔・南大門	播磨守	重任
藤原基隆	大炊御門万里小路(御)殿	伊予守	重任
藤原忠隆	大炊御門万里小路(御)殿	備中守	重任
藤原忠隆	大炊(御)殿	丹波守	重任
藤原国明	尊勝寺薬師堂・観音堂・五大堂	伊予守	重任
藤原国明	大炊御門(御)殿	伊予守	位の上昇
高階為家	尊勝寺阿弥陀堂	越前守	都の役職に転任
高階仲章	尊勝寺金堂・講堂・鐘楼など	但馬守	重任
平 正盛	尊勝寺曼陀羅堂	若狭守	重任
平 正盛	白河蓮華蔵院	備前守	重任
藤原為忠	二条堀河(御)殿	安芸守	重任
藤原顕頼	八条大宮御所	美作守	重任

※重任＝任期が終わっても重ねてその役職につくこと。平安時代には重任と言えば受領を連想した。

(『史料大系日本の歴史 第2巻中世1』大阪書籍, p. 116, より筆者作成)

【資料5】「能登国における荘園の成立」

立荘(荘園の成立)の年代別	荘園数	面積(%)
往古荘園(古くからある荘園)	1	2
1051年	1	6
1136～1150年(鳥羽院政)	8	74
1184～1197年(後白河院政～)	9	14
1204～1275年	9	4
合計	24	100

(石井進「院政時代」『講座日本史2』東京大学出版会, 1970年, p. 209より筆者作成)

第7時

【資料1】「平正盛の活躍」

「平正盛の活躍」

5月6日

殿下（関白藤原忠実）がおっしゃるには、最近、京都市中は強盗が毎夜断たない。よって（平）備前守正盛に強盗追捕を命じた。とのことである。

5月26日

平正盛、同月6日の強盗追捕の功績によって（官位が）正五位下になる。

（『中右記』元永2（1119）年条，増補史料大成刊行会編『増補史料大成』14，臨川書店，1965年，より筆者作成）

【資料2】「僧兵の強訴」

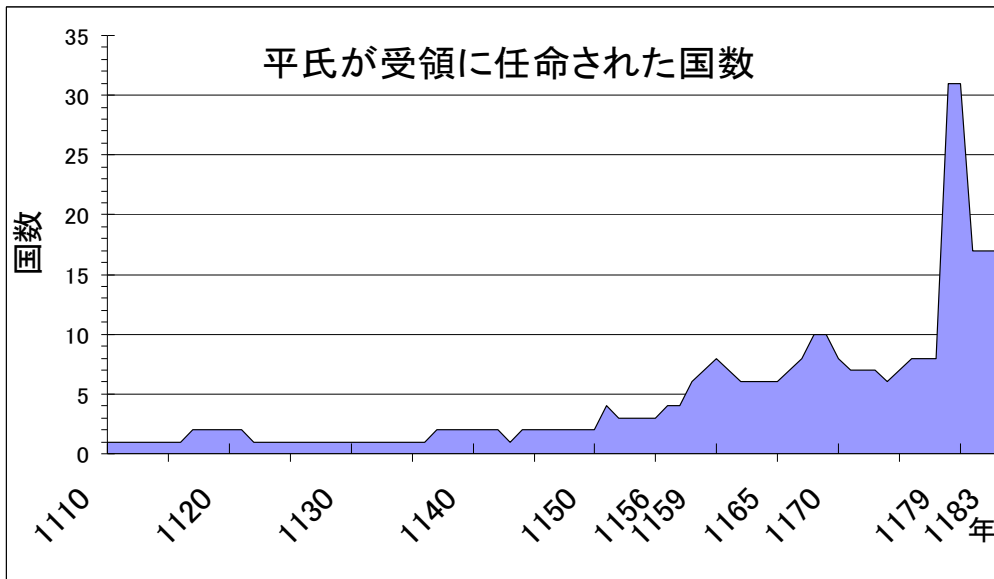
【資料5-7】「僧兵の強訴」

延暦寺の僧兵が、興福寺の乱暴を訴え、興福寺側の責任者の処罰を求めて白河院の御所に僧兵2000人以上で押しかけてきた。武士は陣を張って守った。僧兵の叫ぶ声は天を動かし、（院の御所の）門前に迫った。出羽守（源）光国・丹後守（平）正盛は鎧を着てこれを防いだ。

※ 強訴はこのほかにも自分たちの利益である荘園の保護や法会のやり方を巡って、このころ頻発していた。

（『長秋記』永久元年（1113）4月1日条，増補史料大成刊行会編『増補史料大成』16，臨川書店，1983年より筆者作成）

【資料3】「平氏が受領に任命された国数」



(菊池紳一, 宮崎康充「国司一覧」児玉幸多, 小西四郎, 竹内理三編『日本史総覧』第2巻, 新人物往来社, 1984年, pp. 9-250, 石丸熙「院政期知行国制についての一考察 とくに平氏知行国の解明をめざして」『北海道大學文學部紀要』 19(3), 1971年, pp. 57-120, 五味文彦「院政期知行国制度の基礎的研究 知行国の変遷と分布」『史學雑誌』 92(6), 1983年, pp. 48-77より筆者作成)

【資料4】保元・平治の乱の関係図

1 保元・平治の乱		保元・平治の乱	
勝者		敗者	
保元の乱 (一五八年)	後白河天皇	皇 室	崇徳上皇 ……流刑(讃岐)
	忠通	藤原氏	頼長……傷死
	義朝	源 氏	為義……死刑 為朝……流刑
	清盛	平 氏	義父 忠正……死刑
平治の乱 (一五九年)	藤原通憲(信西) ……殺害	院の近臣	藤原信賴……死刑
	平清盛 重盛	武 士	源義朝……敗死 義平……翌年死刑 頼朝……流刑(伊豆)

平治の乱(平治物語絵巻) 1159年12月9日、藤原信賴・源義朝の軍勢が後白河上皇の御所を急襲した。しかし、武力にまさる平清盛は、この乱に勝利し、平氏の政権を確立する。 ポストン美術館蔵

(東京法令出版『グラフィックワイド歴史』2010年, p. 68より筆者作成)

【資料5】「平氏の政治」の説明文、皇室との関係図

2 平氏の繁栄

平清盛の一族の若君といえは、どんなに高い家柄のもでも、肩をならべ対等なものもいえないくらい、その勢いはたいへんなものであった。清盛の妻の兄の平時忠は「この一門でないものは人間ではない」とさえいったものだ。このようなありさまだから、どんな人でも…この一族の縁につながろうとした。…平氏の治める国は30余国で半分以上を占めた。
(「平家物語」)

A 平氏と皇室の関係

— は婚姻関係 ● 数字は天皇の即位順

(東京法令出版『グラフィックワイド歴史』2010年p. 36, p. 68より筆者作成)

【資料6】「大輪田泊の様子」



(『兵庫県立考古博物館コンセプトマップ』 pp. 51-52より筆者作成)

第8, 9時

【資料1-1】「後白河法皇崩御」

「後白河法皇崩御」

(3月13日) この日寅の刻に、太上法皇(後白河法皇)、六條西の洞院の宮で崩御(御年六十六)する。

(『玉葉』建久3(1192)年3月13日条 高頭忠造編『玉葉』下巻, 哲學書院, 1908年, pp. 798-800より筆者作成)

【資料1-2】「頼朝, 征夷大將軍に任命される」

「頼朝, 征夷大將軍に任命される」

検非違使長官から伝令が着きました。征夷大將軍に任命されました。

(『吾妻鏡』建久3(1192)年7月20日条 貴志正造訳注『全譯吾妻鏡』第2巻, 新人物往来社, 1976年, p. 249より筆者作成)

【資料2】「頼朝, 兵を挙げる」

「頼朝, 兵を挙げる」

1180年に源頼朝などが兵を挙げ源平の戦いがはじまった。頼朝は伊豆・駿河の両国を奪い取ってしまった。(中略)。あたかも(平)将門のようだ。

(『玉葉』治承4年9月3日条 宮内庁書陵部編『図書寮叢刊 九条家本 玉葉7』明治書院, 2002年, p. 191より筆者作成)

【資料3】「頼朝のご恩」

「頼朝のご恩」

頼朝様は相摸国府に着きまして、初めて論功行賞を行いました。北條時政、武田信義以下、二十五人の人達に今までの領地を認めたり、又は新しい領地を与えたりしました。

(『吾妻鏡』治承4年10月23日条 貴志正造訳注『全譯吾妻鏡』第1巻, 新人物往来社, 1976年, p. 82より筆者作成)

【資料4】「頼朝、東国の支配権を認められる」

「頼朝、東国の支配権を認められる」

東国における荘園や国領（受領国司が管理する領地）の領有権を（平氏の支配から）もとのように回復するさせるべきことを命じる。その回復を実現するため、源頼朝の東国の支配権を承認する。しかし、北陸道ばかりは義仲を恐れ、その命令はなされない。頼朝にとってかわいそうなことだ。

（『玉葉』寿永2年閏10月13日条 宮内庁書陵部編『図書寮叢刊 九条家本 玉葉8』明治書院, 2002年, pp. 260-261より筆者作成）

【資料5】「平氏の滅亡」

「平氏の滅亡」

長門国（山口県）の壇ノ浦の海上で、源氏と平家の軍船が出合って、戦いました。昼頃になって平家軍は負けたので、平清盛の妻時子は、三種の神器の「天叢雲劍（あめのむらくものつるぎ）」（草薙劍）を持って、先帝（安徳天皇）は抱きかかえられて、海へ飛び込みました。

（『玉葉』寿永2年閏10月13日条 宮内庁書陵部編『図書寮叢刊 九条家本 玉葉8』明治書院, 2002年, pp. 260-261より筆者作成）

【資料6】「守護・地頭の設置」

「守護・地頭の設置」

聞くところでは、北条時政以下の家来たちが、五畿・山陰・山陽・南海・西海の諸国を賜り、荘園・公領を問わず、兵糧米を一段（約30m四方）につき五升（約9リットル）の割で徴収することができるようになった。これは単に兵糧米の徴収だけでなく、すべて田地を支配するようになるだろう。

（『玉葉』文治元年11月28日条 宮内庁書陵部編『図書寮叢刊 九条家本 玉葉9』明治書院, 2003年, pp. 234より筆者作成）

【資料7】「頼朝、近衛右大将に任命される」

「頼朝、近衛右大将に任命される」

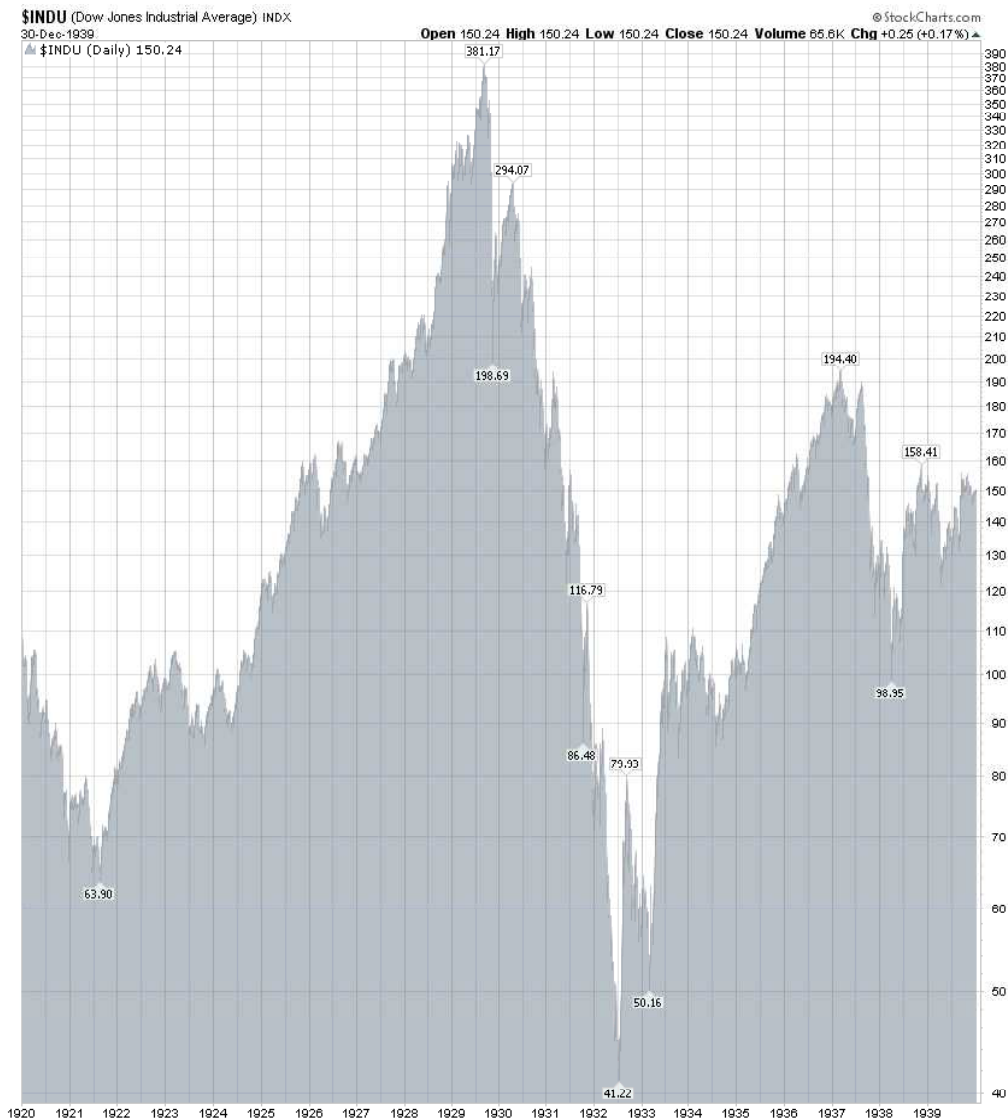
右大臣（藤原兼雅公）は右大将の辞表を提出しました。そこで今夜巫相（大納言頼朝）を右大将に任命するようにと、後白河上皇からの命令書が出されました。

（『吾妻鏡』建久元年11月24日条 貴志正造訳注『全譯吾妻鏡』第2巻, 新人物往来社, 1976年, p. 195より筆者作成）

第6章 単元「戦争の拡大と国家、国民の動向」 資料

第1時

【資料1】ニューヨーク株式市場株価の推移(1920年～40)



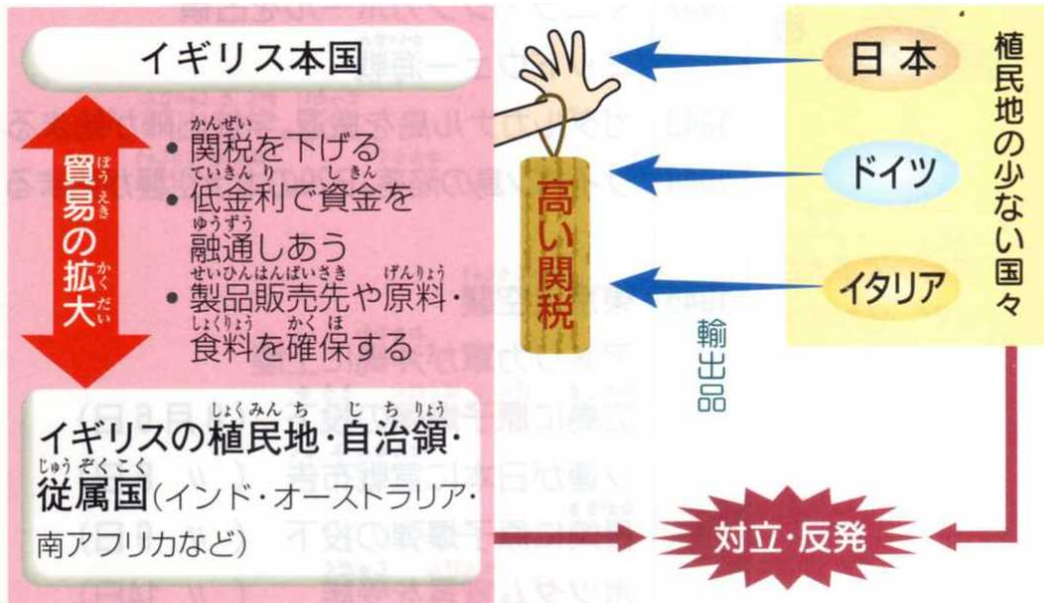
「Dow Jones Industrial Average (1920 - 1940) Daily」(<http://stockcharts.com/freecharts/historical/djia19201940.html>より筆者作成)

【資料2】株価の暴落

そして「暗黒の木曜日」24日がやってきた。取引所では人びとがおしあい、わめきあい、ひっきりなしにかかっている電話は、ことごとく「売り」である。この日1日で約1,300万株が売られ（前日のおよそ倍）、なかにはいくら値を下げて、買い手が見つからない株も少なくなかった。この日に自殺した投機家が11人ほどというニュースも流れ、高層ホテルで部屋をもとめると、「おやすみになるのか、窓を利用なさるのか」ときかれるありさまであった。しかも29日は「最悪の日」となり、1,640万株が売り出された。

(岩間徹，山上正太郎『教養人の世界史（下）現代教養文庫』社会思想社，1964年，p.196より筆者作成)

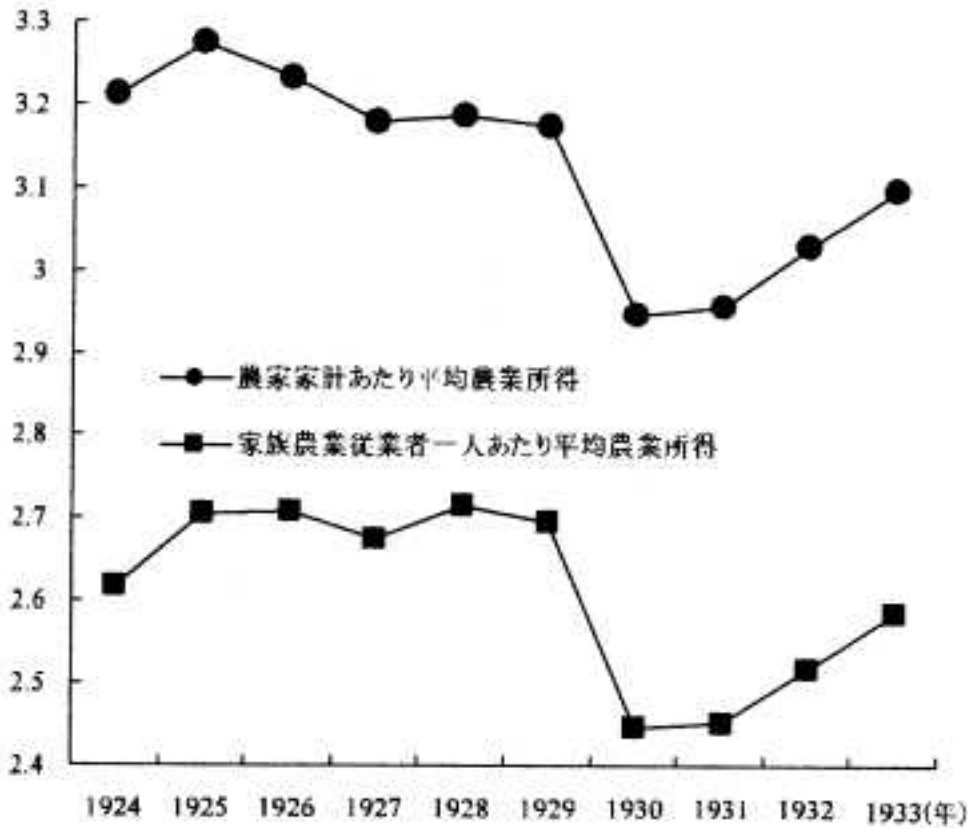
【資料3】ブロック揭示の模式図



(浜島書店編『つながる歴史』2012年, p. 198, より筆者作成)

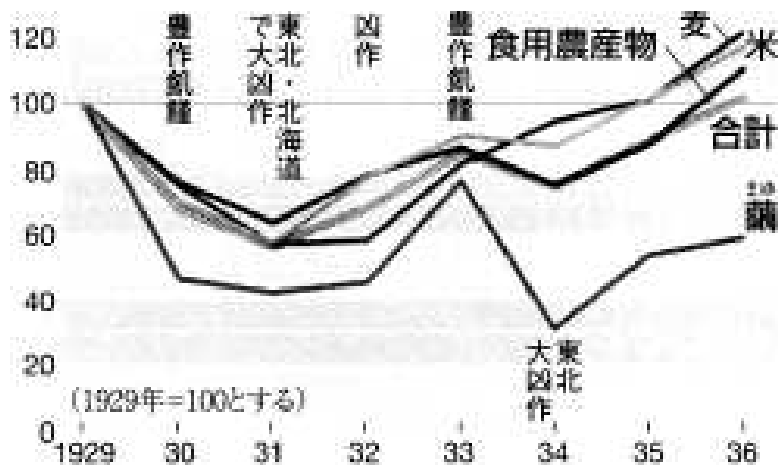
第2時

【資料1】 恐慌前後での農業所得の推移（対数値）



（藤栄剛，仙田徹志「恐慌ショックに対する農家の経済行動—昭和恐慌下における農家の対処行動を中心として—」日本農業経済学会『農業経済研究』第83巻，第1号，2011年，p. 17』，原典資料：帝国農会『最近十ヶ年に於ける農業経営の変遷』）

【資料2】 農産物価格の推移



（山川出版社編『詳説日本史図録（第4版）』山川出版社，2010年，p. 266）

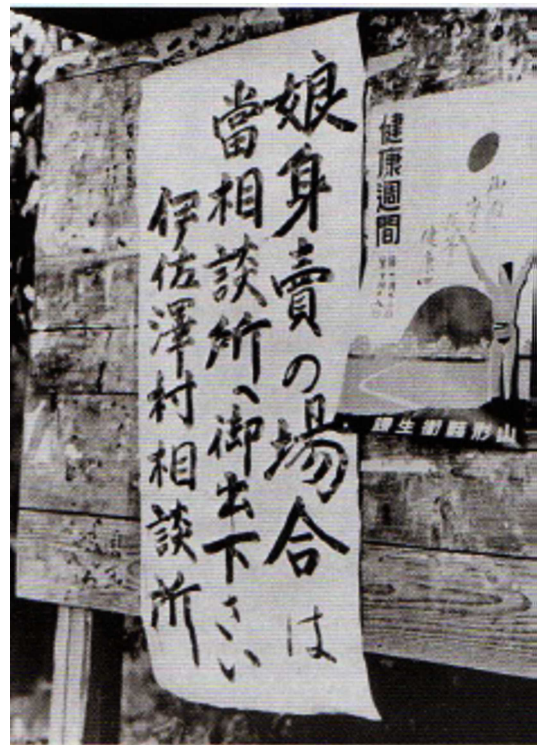
【資料3】東北地方の飢饉の様子



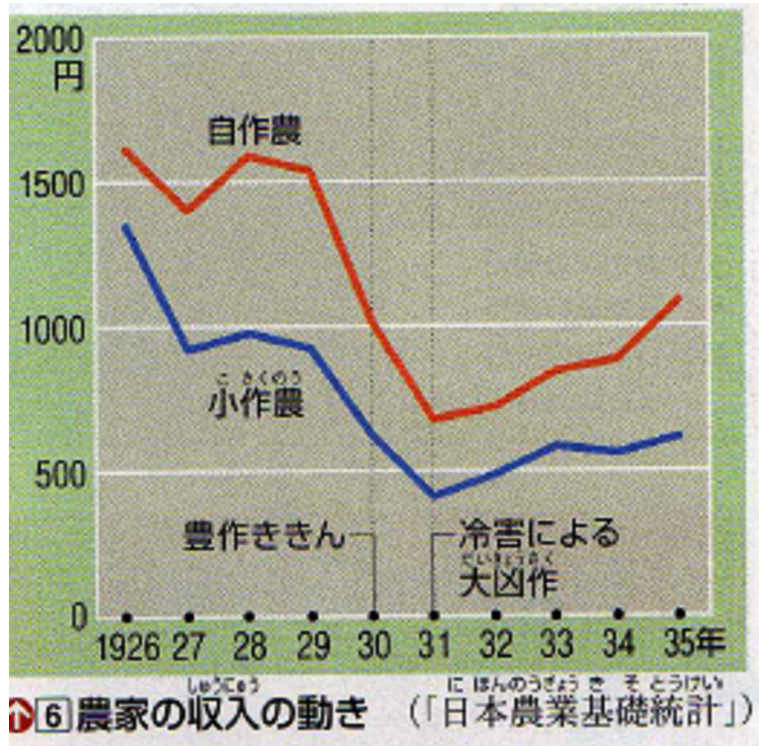
(朝日新聞社編『ここが変わった！新発見日本の歴史05現代1 泥沼は避けられなかったのか』朝日新聞出版, 2013年, p. 25)

【資料4】身売り相談所のビラ

(朝日新聞社編『ここが変わった！新発見日本の歴史05現代1 泥沼は避けられなかったのか』朝日新聞出版, 2013年, p. 24)

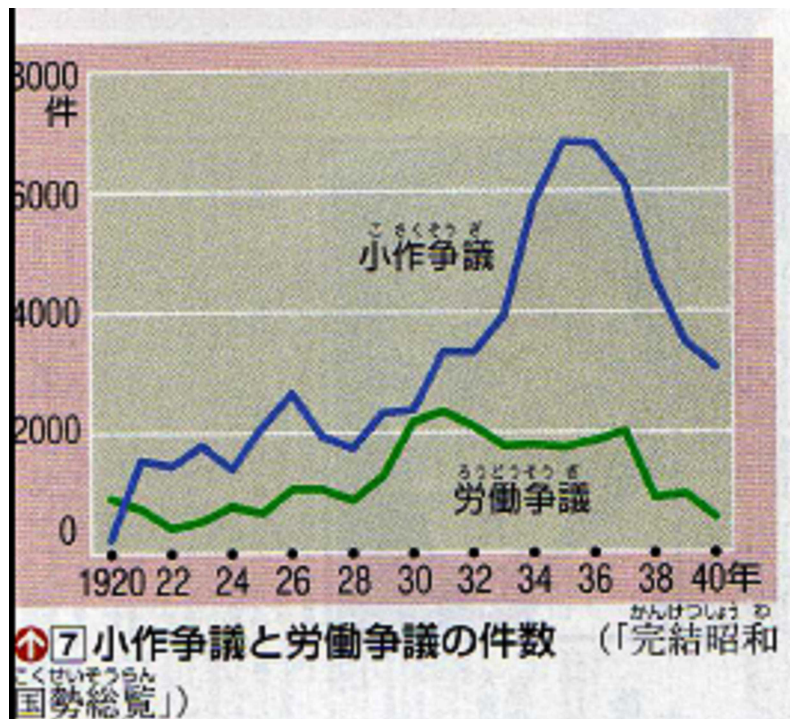


【資料5】農家の収入の動き



(五味文彦ら『新しい社会 歴史』東京書籍, 2012年, p, 201)

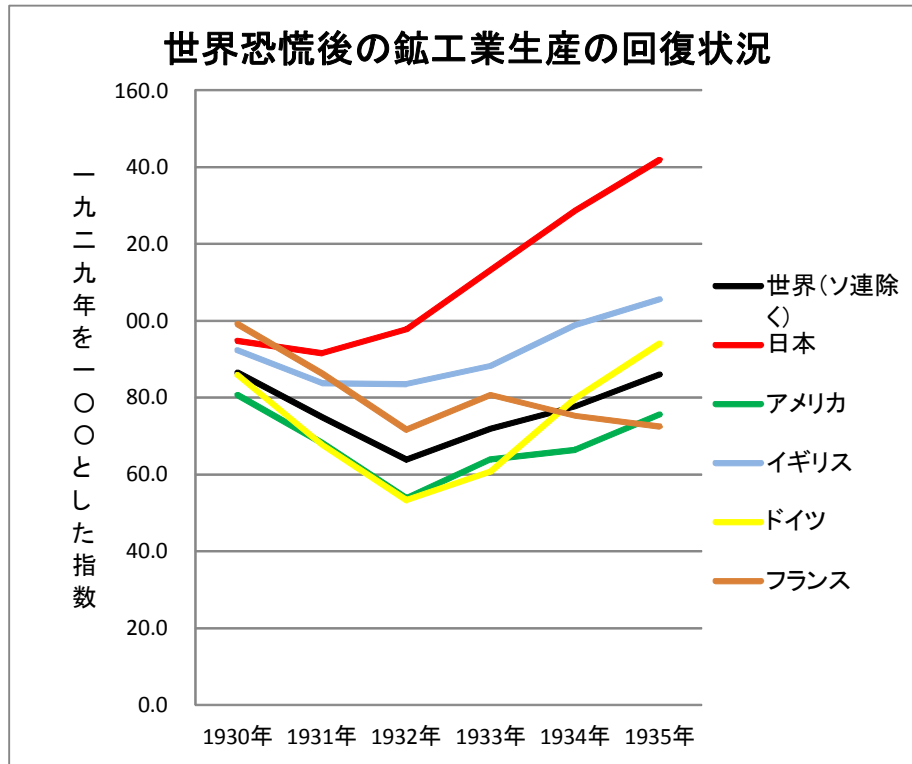
【資料6】小作相互と労働争議の件数



(五味文彦ら『新しい社会 歴史』東京書籍, 2012年, p, 201)

第3時

【資料1】世界恐慌後の鉱工業生産の回復状況



(三浦良一，原朗編『近現代日本経済史要覧』東京大学出版会，2007年，p.114より筆者作成)

【資料2】石原莞爾『満蒙問題私見』

(1) 満蒙(満州と内蒙古：現在の南モンゴル)の価値

政治的 国防上の重要な場所である。

朝鮮の統治は、(満蒙)を我が国の勢力下におくことで、安定するだろう。

満蒙を支配することは、ソ連の東進を阻止して、朝鮮半島や中国に安定をもたらすだろう。

経済的 「満蒙」の農産物は、我が国の食糧問題、不況の問題を解決することができるだろう。

(2) 満蒙問題の解決

解決の唯一の方法は満州を日本の領土とすることである。

(以下略)

(歴史学研究会編『日本史史料[5]現代』岩波書店，1997年，p.8より筆者作成)

資料

【資料3】「満蒙の危機」に関する新聞記事（当時の新聞の社説）

「歴史を忘却し、条約を無視し、あまつさえ相手国に対して侮辱を加ふ（え）る（という点で）日本はまさに支那（中国）のために、国威と利益を蹂躪された（踏みにじられた）被害者である」

（『東京日日新聞』1932年9月23日）

【資料4】 中国の状況

1926年 蒋介石ひきいる国民党が、対外的には列強の権益回収を要求していく北伐を開始した。

1927年 南京事件、漢口事件で領事館（日本の外交施設）や居留民（中国に住む日本人など）が国民党による襲撃を受ける。

1927～1928年 日本人居留民を保護する目的で日本軍による山東出兵が行われる。

（筆者作成）

第4時

【資料1】「東大生に対する意識調査」

問い「満蒙（満州と内モンゴル）に武力行使は正当か」正当である88%（ただちに武力行使をするべきである52%、外交手段を尽くして話し合いの後にするべきである36%）

問い「君たちは満蒙を日本の生命線とみなすか」

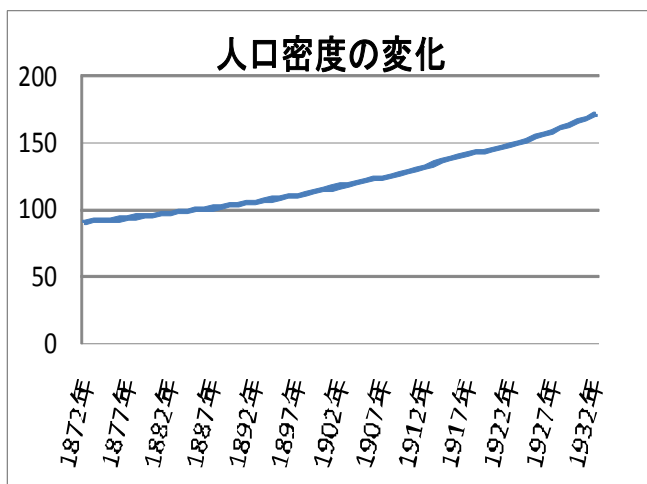
はい90%

問い「満蒙問題は軍事行動をもって解決されるべきと思うか」

はい90%

（加藤陽子『さかのぼり日本史②昭和とめられなかった戦争』NHK出版，2011年，p.115より作成）

【資料2】明治以降の人口密度の変化



1932年の1年間で、人口は100万6千人増加している。

（総務省 統計局ホームページ, <http://www.stat.go.jp/data/chouki/02.htm>より筆者作成）

【資料3】『東京日日新聞』1932年9月23日社説

「歴史を忘却し、条約を無視し、あまつさえ相手国に対して侮辱を加ふ（え）る（という点で）日本はまさに支那（中国）のために、国威と利益を蹂躪された（踏みにじられた）被害者である」（『東京日日新聞』1932年9月23日）

（再掲：筆者作成）

【資料4】中国の状況に関する年表

- | | |
|------------|--|
| 1926年 | 蒋介石ひきいる国民党が、対外的には列強の権益回収を要求していく北伐を開始した。 |
| 1927年 | 南京事件、漢口事件で領事館（日本の外交施設）や居留民（中国に住む日本人など）が国民党による襲撃を受ける。 |
| 1927～1928年 | 日本人居留民を保護する目的で日本軍による山東出兵が行われる。 |

（再掲：筆者作成）

【資料5】「満蒙の権益を守る理由」

満蒙権益は、日露戦争（1904～1905年）の際に「20万の生霊と20億の国ど（国費）」とのちに決まり文句のようにしていわれる犠牲で獲得したという認識が国民には強かった。実は、日露戦争から25年しかたっていません。国民の多くは、親兄弟や自分自身が兵として戦った経験をもっていました。それだけに、何としても満蒙権益は死守しなければならないという意識が強かった。

また、日本が満蒙に対しておこなった投資は約14億円（1926年の統計）にものぼり、しかもその約85%が満鉄・政府による投資、つまり国がかりの投資でした。

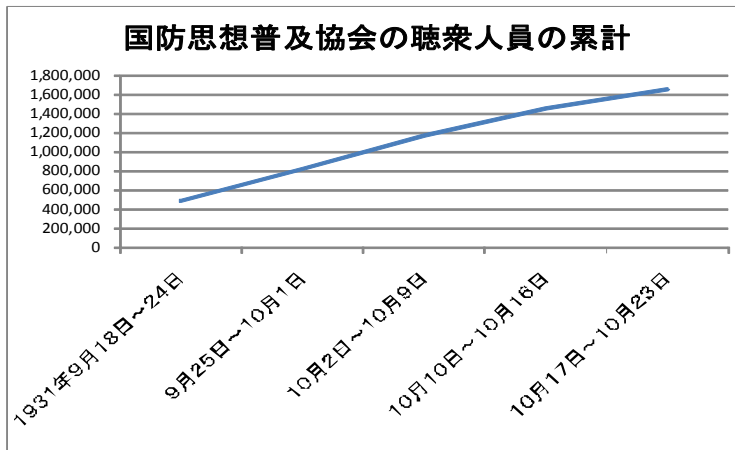
（加藤陽子『さかのぼり日本史②昭和 とめられなかった戦争』NHK出版，2011年，pp.115-116より筆者作成）

【資料6】「(日本の農家の打撃) 農家の平均所得」

農家の平均所得	1929年	➡	1931年
	1,326円		650円

（中村政則「大恐慌と農村問題」『岩波講座日本歴史19 近代6』1976年，p.139より筆者作成）

【資料7】講演会の開催



引退した軍人や青年団などに軍事行動の正当性を訴える講演会を開くことで、戦争の拡大への理解を求めた。

(「国防思想普及協会の聴衆人数の累計」伊香俊哉『戦争の日本史22 満州事変から日中全面戦争へ』 pp. 52-53 このほか、市販の資料集による満州～朝鮮半島にかけての日本の権益を示した地図を用いた。)

第5時

【資料3】満州事変から日中戦争の関連地図



(松田寿男, 森鹿三編『アジア歴史地図』平凡社, 1966年, p. 84より筆者作成)

【資料4】『支那事変の経済界に及ぼしたる影響』(抜粋)

日本の財界(社長)のインタビューより

「中国市場が閉ざされた場合、輸出不振になり、軍事物資を中心に輸入超過になる。」
 「戦争による景気拡大を願っている。」

【資料5】『国防の本義と其強化の提唱』

「農山漁村の疲弊の救済は最も重要な政策」である。
 「中国の排日運動のため出兵を余儀なくされている。」
 昭和九年拾月拾日 陸軍省新聞班

陸軍省新聞班編『国防の本義と其強化の提唱』1934年, p. 33, 「国立国会図書館近代デジタルライブラリー」(<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1455287>, 2015年1月2日閲覧), 加藤陽子『それでも日本人は戦争を選んだ』朝日出版社, 2009年, p. 314より筆者作成, この資料は軍部が初めて思想・経済問題に言及し、しかも政治介入を公然と表明したもので、政治家(美濃部達吉ら)や警察(内務省)や外務省などから表現が行き過ぎだと反発を受けた。